

JPMA-PhRMA-EFPIA 共同記者会見
「創薬研究の実情とイノベーションの貢献」
《研究者略歴》

マイケル・L・ハットン

イーライリリー・アンド・カンパニー 神経変性疾患領域研究 バイスプレジデント



1993年、ケンブリッジ大学のPhD（博士号）を取得。1994年、南フロリダ大学ポスドク研究員として、John Hardy教授の下でアルツハイマー病の遺伝学の研究に従事。1996年、メイヨー・クリニックにおいてアルツハイマー病および関連する認知症を専門とする研究室を設立。2003年、メイヨー医科大学の神経科学教授に着任。

1998年、前頭側頭型認知症（FTD）患者における染色体17q21上のタウ遺伝子（*MAPT [tau]*）の変異を発見。この発見は、FTD患者の病因を特定しただけでなく、タウ遺伝子の機能不全でアルツハイマー病をはじめとする神経変性が惹起されることを示唆するものであった。また、ハットン博士の研究グループは神経原線維変化を発生するマウスモデルを初めて作成し、タウ遺伝子関連神経変性の機序の検討や治療的仮説の検証を行った。さらに、アミロイドプラークを発生する系統と上記マウスを交配することで、アミロイドβが神経原線維変化形成を促進することを裏付けるという*in vivo*エビデンスを初めて得た。これらの業績によりハットン博士はポタムキン賞とメットライフ賞を受賞した。

2006年、ハットン博士の研究グループは、FTDの原因とされる染色体17q21上の別遺伝子であるプログラニューリン遺伝子の変異を発見した。さらに、機能性プログラニューリンの部分的な喪失（ハプロ不全）によって疾患が発症することが証明され、FTDおよびアルツハイマー病をはじめとする神経変性疾患に対する治療についての研究に全く新しい道が開かれた。

2007年7月、ハットン博士はMerck Research Laboratories社に移籍し、メルク社シニアディレクターに就任。その後、2009年5月、ハットン博士はイーライリリー社に移籍して神経変性疾患領域の創薬を指揮するチーフ・サイエンティフィック・オフィサー（CSO）に就任し、2012年には英国のニューロサイエンス部門の責任者に任命された。2018年には神経変性研究のバイスプレジデントに就任し、現在は、米国Lilly Research Laboratoriesに勤務。世界各地の全Eli Lilly施設におけるアルツハイマー病および関連する神経変性疾患の創薬の責任者である。

木村 禎治 (きむら ていじ)

エーザイ株式会社 執行役 ニューロロジービジネスグループ チーフディスカバリーオフィサー



エーザイ株式会社のニューロロジービジネスグループ チーフディスカバリーオフィサーを務め、中枢神経疾患研究を行っているグローバル4拠点におけるすべての創薬活動を統括しています。また、同社執行役にも就任しています。

1987年にエーザイの化学系研究者としてキャリアをスタートしました。以降、複数の中枢神経系創薬プロジェクトに携わり、アルツハイマー病疾患修飾型薬剤を始め中枢神経疾患における複数の候補化合物の創出に貢献しました。2007年に創薬第一研究所化学系統括課長に就任し、医薬品化学研究をリードし、現在後期臨床開発段階にあるアルツハイマー病の疾患修飾型薬剤や不眠症治療薬を創出しました。

2010年にニューロサイエンス創薬ユニット グローバル探索研究部長に就任し、2013年にはニューロサイエンス&ジェネラルメディスン創薬ユニット デピュティプレジデント兼グローバル探索研究部長として、特にアルツハイマー病およびてんかん疾患領域の神経科学に焦点を当てたグローバルの中枢神経系創薬業務を担当しました。この間、多面的な切り口からのアルツハイマー病疾患修飾剤やレビー小体病を標的とした薬剤の創製や、抗てんかん薬ペランパネルの効能拡大や後継化合物の創製を行い、エーザイの中枢神経領域のポートフォリオの拡大に貢献しました。2016年以降、現在の職務を務めています。

学歴は、1985年に京都大学薬学部薬学科を卒業、1987年には京都大学薬学研究科修士課程を修了しました。さらに、1993年に京都大学大学院薬学研究科にて博士学位(Ph.D.)を取得しました。また、1995年から2年間米国スクリプス研究所にて客員研究員を務めました。

古賀 淳一（こが じゅんいち）

第一三共株式会社 専務執行役員 研究開発本部長（2018年4月-）

生年月日：1954年5月30日（64歳）

第一三共(株)での職歴

- 2009年 製薬技術本部 参事
- 2010年 製薬技術本部 バイオ医薬研究所所長
- 2012年 製薬技術本部 執行役員バイオ担当
- 2013年 研究開発本部 執行役員バイオ統括部長
- 2016年 常務執行役員 バイオ推進担当 研究開発本部長兼研究基盤統括部長
- 2017年 常務執行役員 研究開発本部長

その他職歴

- ・日本ケミカルリサーチ(株) 取締役研究本部長（1998-2001）
- ・アムジェン(株)／武田バイオ(株) 取締役開発推進本部長（2001-2009）

業界活動

- 1992年- 日本製薬工業協会 ICHプロジェクト委員会委員
国際ガイドラインの作成に関わる。
 - ・Q5A（ウイルス安全性評価）並びにCTD-Q-Bioのトピックリーダー
 - ・Q5E（バイオ医薬品同等性・同質性）並びにQ11（原薬製造に関わる新しい品質哲学）の副トピックリーダー 等
- 2003年- バイオロジクスフォーラム 発起人 名誉世話人
- 2013年- 次世代バイオ研究技術組合 理事
- 2015年- 日本バイオ産業人会議（JABEX）世話人
- 2016年- 日本製薬工業協会 バイオ医薬品委員会 委員長
- 2017年- 一般財団法人バイオインダストリー協会 理事
- 2017年- 一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム 理事
- 2017年- 一般社団法人バイオロジクス研究・トレーニングセンター（BCRET） 発起人 理事
- 2018年- 文部科学省ライフサイエンス委員会 創薬研究戦略作業部会 委員
- 2018年- 一般社団法人産業競争力懇談会（COCN）実行委員
- 2018年- AMED 遺伝子・細胞治療研究開発基盤事業、プログラムスーパーバイザー（PS）
- 2018年- AMED 難治性疾患実用化研究事業、プログラムオフィサー（PO）

学 歴

- ・京都大学農学部卒 医学博士（京都府立医科大学）

モーヒト・トリッカー

アッヴィ社 オンコロジー早期開発グローバルヘッド（バイスプレジデント）



アッヴィ社のオンコロジー早期開発グローバルヘッド（バイスプレジデント）。アッヴィ社のオンコロジー早期開発パイプラインの戦略ビジョンの策定から臨床における実証（Proof of Concept）までを担う。トリッカー博士は、20年以上の創薬および開発経験がある。アッヴィ入社前は、Triphase Accelerator社のプレジデント、CSO およびヘッドを歴任し、同社の役員会メンバーでもあった。Ambit社、Genetech社、Centocor/Johnson and Johnson社勤務を経て、Triphase-Celgene

Joint Steering Committeeの委員長を務めた。現在は、EnCycle Therapeutics社の社外役員でもある。トリッカー博士はファーストインクラスまたはベストインクラスのがん治療薬の開発に情熱を注いでおり、専門は、細胞シグナル伝達、腫瘍免疫学、アポトーシス、タンパク質ホメオスタシス、神経科学、薬剤の反応や毒性を予測するバイオマーカーの開発などである。発表論文数は40本を超えており、複数の特許申請を行っている。また、米国癌研究会議（AACR）、米国臨床腫瘍学会（ASCO）、米国血液学会（ASH）、欧州血液学会（EHA）における研究発表の経験がある。南カリフォルニア大学で博士号（PhD）を取得し、ウェイン州立大学の准教授を歴任後、製薬業界に入る。

上野 裕明 (うえの ひろあき)

田辺三菱製薬株式会社 常務執行役員 創薬本部長
日本製薬工業協会 研究開発委員会 委員長

職歴

2018.4- 田辺三菱製薬株式会社 常務執行役員 創薬本部長
2017-2018 執行役員、創薬本部長
2015-2017 執行役員、CMC 本部長.
2014-2015 執行役員、研究本部研究企画部長
2007-2013 創薬化学第二研究所（代謝&心循環器疾患）所長
2006-2007 化学研究所所長
2005-2006 創薬創薬第4研究所（癌・肝疾患）所長
1992-1994 スクリプス研究所 ポストドクトラルフェロー
1983 三菱化成工業（現在の三菱ケミカル株式会社）入社

社外活動等

- 1) 日本製薬工業協会 研究開発委員会 委員長
- 2) 一般財団法人バイオインダストリー協会 理事
- 3) 日本薬学会医薬化学部会 監事
- 4) 日本化学会会員
- 5) 有機合成化学協会会員

学歴

1992 東京工業大学大学院・生命理工学研究科 博士号（理学博士）
1983 東京工業大学大学院・理工学研究科 修士号
1981 東京工業大学・工学部 学士号

資格等

2012 シニアマネジメント・プログラム、田辺三菱製薬株式会社.
2014 グローバル・エグゼクティブ・プログラム、三菱ケミカルホールディングスグループ
2016 シニアエグゼクティブのためのブレークスルー・プログラム
(IMD ビジネススクール、スイス)